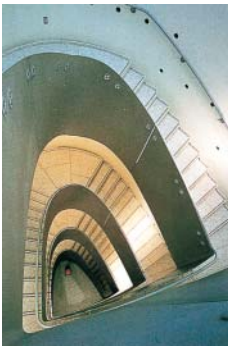




大学美術館全景



上右：食堂テラスを見下ろす
上左：大学美術館（上野）の螺旋階段
左：陳列館
（写真は4点とも『東京芸術大学大学美術館』より）

一九九（平成十二）年十月四日、上野校地に大学美術館が盛大に開館した。この日は開校記念日。一八八七（明治二十）年に東京美術学校が設置された日から、百二十年め。この間に蓄積されたコレクションは二万七千件にのぼる。近現代の日本美術コレクションとしては、質・量ともにまちがいに最大級だ。なにより制作の現場で収集・蓄積されてきた点に、特色がある。まさにそれは、多くの人々がここに生きてきた証だ。そのコレクションの中から、えりすぐられた作品一五七件による「開館記念・東京芸術大学美術館所蔵名品展」には、一カ月余りの会期中に、じつに三十四万人の人々が訪れた。それまで校内に一般の人はいり入れなかったから、その新鮮さもあつたのだろう。かつて若き日の巨匠たちが踏みしめた地を、確かめるように逍遙し、未来のアーティストたちと同じ食堂で食事を楽しむ人々の表情は、とても印象的だった。そうです、彼らがこれからを担っていくんです、応援してあげてくださいといった

東京芸術大学美術学部1999年

大学美術館開館

佐藤道信

日本近代美術史。主要著書に『日本美術 誕生 近代日本の「ことば」と戦略』『明治国家と近代美術 美の政治学』がある。

くなる温かな空気が、そこにあった。

大学美術館は、大浦食堂のあった場所に建てられた。戦前から貧しい学生たちを支え、美校名物の一つだった大浦食堂は、いまも美術館の一角で家庭の味を提供してくれている。ほかに生協や画翠、ホテルオークラのカフェテリア、ミュージアムショップなども入っており、学校生活を支える場にもなっている。

美術館がここにできたことで、上野校地の美術学部は敷地の中央に緑を残し、周囲をぐるりと建物でとりかこむ形になった。美術館では、特別展のほか、各科主催の企画展や、修了制作展なども行われ、教育研究の現場と社会を結ぶ場になっている。展示施設としては、旧芸術資料館の陳列館も、小企画の展示に使われている。昭和初期のレトロな外観だが、内部は現代美術にもピッタリの使い勝手のいい空間だ。拠点となるこうした場だけでなく、校内のあちこちにも作品を展示し、現場と展示を一体化させたらどうかという、ファクトリー・ミュージアムの構想もあった。

一方、この一九九〇年代には、取手校地の開校（九一年）という大きな動きがあつた。いまここには、美術部の一年生と、先端芸術表現科、一部の大学院、音楽学部の音楽環境創造科が展開している。ここにも美術館がある（九四年開館）。設計は、上野・取手の両館ともに、本学建築科の六角規文（のりのり）取手館には、各科教官約三十名による遊び心満載の装飾も仕込まれている。また上野館のロゴマークは、デザイン科の蓮見智幸（はすみともゆき）の現場の強みが、最大限に発揮されている。

芸術とかアートとかいうと、高尚、カッコイイ、でもこむずかしいというイメージも強い。アーティストは作品という自己実現の手段があるから、パワフルだが素朴で優しい人が多い。この大学、なんかみんな表情が明るいね、と言った人がいた。作品だけでなく、アーティストという人にも触れる機会があつたら、きっとみんなハマルだろう。そんな魅力がある。創る、この原点も、そして可能性も、同じなのかもしれない。

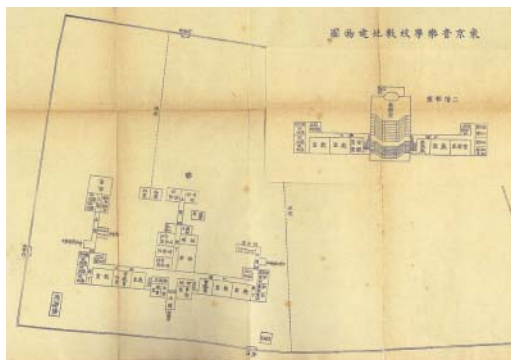
（なつ・つ・べつしん／美術学部芸術学科助教授）

タイムカプセルに乗っ

東京芸術大学音楽学部1998年 新しい奏楽堂の 完成

瀧井敬子

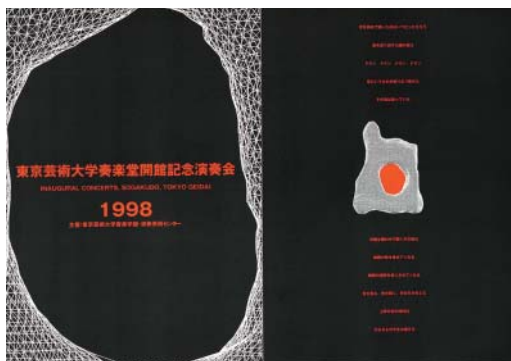
音楽学（ドイツロマン派、および日本洋楽草創期の研究）著書に『漱石が聴いたベートーヴェン 音楽に魅せられた文豪たち』、『森田外訳オペラ「オルフェウス」』（解説・校訂）がある。



『東京音楽学校一覽 明治32年至明治33年』に掲載された「敷地建物図」



二代目奏楽堂の竣工記念式典におけるテープカットのシーン（三笠宮殿下、妃殿下をお迎えして）



開館記念演奏会のプログラム。表紙デザイン&キャッチコピー：日比野克彦

—— 一九八（平成十）年四月二十三日、「奏楽堂竣工記念式典」が行われた。これは二代目の奏楽堂である。

一九〇（明治三十三年）年、東京音楽学校の新校舎に講堂として付設されたのが、初代の奏楽堂であった。校舎全体を、ふたつの翼を目一杯に広げた鳥にたとえるならば、初代奏楽堂はその頭部と胸のあたりに相当しようが、当時、ここは日本で唯一のコンサートホールとして、わが国の洋楽草創期の華麗な中心的舞台となった。寺田寅彦に誘われてここにしばしば足を運んだ夏目漱石も、その感想を小説『野分』の作中人物の一人に、「楽堂の入口を這入ると、霞に酔ふた人の様にぼつとした。空を隔す茂みのなかを通り抜けて頂に攀じ登った時、思いも寄らぬ、眼の下に百里の眺めが展開する時の感じはある」と、いささか誇張気味に語らせている。

一八九九年に作成された「東京音楽学校敷地建物図」

を見ると、二階建ての両翼に教室、練習室が櫛比しているなか、一階に「男教員和室」、二階に「女教員室」とそれぞれ分かれていて、その頃のモラルの反映として興味深い。東京音楽学校は当時日本で唯一の男女共学の学校であったが、男子学生と女子学生がみだりに話をすることは禁じられていた。そうした倫理観が教員室を別々にするにも表れていたのである。奏楽堂は二階部分にあつて、その奏楽堂を挟んで校長室と「女教員室」があつた。

一九七二（昭和四十七）年になると、老朽化が激しくなつた奏楽堂を巡つて、これを明治村へ移築して、新しい奏楽堂を建てる計画が具体化した。ところが、明治村への移築が決定して、実際に作業に入ろうとしていた矢先の一九七九（昭和五十四）年十月、日本建築学会と音楽家のグループがその移築案に猛烈な勢いで反対した。彼らは奏楽堂の現地保存の要望書を文部省と東京芸術大学学長に提出したのである。こうして新奏楽堂の建設計画はストップせざるを得なくなり、初代の奏楽堂をどこに移築するかという問題で、その後幾年もの間、激しい

議論が交わされることになった。結局、台東区に移管され、上野公園内で一九八七年三月、初代奏楽堂は修復と移築を完了。こうして新しい命を得たのは大いに慶賀すべきことであつた。

とはいえ、一度頓挫した新しい奏楽堂の建築計画はその後二十年近くも中断され、夢は夢で終わるかに見えたところが二十一世紀を目前にした一九九八年、大学の悲願は実つた。二代目の奏楽堂が初代のあつた場所に落成したのである。「奏楽堂竣工記念式典」に続いて、四月二十八日から六月六日まで全十一回にわたつて、開館を祝う特別コンサートが盛大に行われた。当時の文部大臣の町村信孝はプログラムに寄せた祝辞のなかで、「日本における西洋音楽の歴史は東京音楽学校の奏楽堂から始まつた」と言えるが、「新しい奏楽堂は二十一世紀に向けて新たな芸術文化の創造と発信拠点」となるだろうと述べている。

大学の積年の夢が叶つて、二代目の奏楽堂が誕生してから今年で、はや七年になる。

（たいき・けいこ/演奏芸術センター助手）